

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【七里小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策	
知識・技能	今年度は前年度より全体的に成果があった。また具体物や映像を活用した授業により児童の理解は高まり、学習状況調査では「授業がよく分かる」と回答する児童が多く、授業改善の効果が現れた。 次年度は、特に理科では既習事項を関連付けることで児童に問題意識をもたせ、主体的に学習に取り組める授業づくりを行う。国語では語彙・文法の補充と文章構造を意識した読解指導、算数・社会では説明活動や資料読み取りを通じた思考力育成を進める。	
思考・判断・表現	今年度は資料の読解やキーワードを用いた文章作りの指導を進めることで、児童の表現力が向上した。一方で、個でじっくり考える時間の不足が課題として残った。 次年度は国語で学年に応じ、本文構造の把握、要旨化、図表照合の指導を体系化し、文字数を制限した要約指導を継続する。理科では児童が見通しをもって観察・実験を行うことで、問題解決の力を向上させる。またどの教科でも必要に応じて、ルーブリックの作成や基礎語彙の強化、家庭学習での語彙トレーニングを進め、全体として説明力の底上げをめざす。校内研修等で指導法を共有し、組織的に改善を図る。	

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> ・基礎的、基本的知識の定着  <指導上の課題> ・知識の確実な習得を図る授業	⇒ ・朝自習や家庭学習における学習プリントの反復を行う。また週や単元の終わり等のタイミングで小テストを行い、児童自身に実態把握をさせ、次へのステップとさせる。 ・既習事項と結びつけた授業展開を行い、既習を確認する機会を多くもち、繰り返し学習のパターン化をする。
思考・判断・表現	<学習上の課題> ・根拠となる資料と自分の考えとの結び付け  <指導上の課題> ・思考する時間の確保 ・意図的な考えのアウトプット	⇒ ・根拠をもとに考えることを繰り返し、文章、図、グラフなどの資料を正確に読み取れるよう、授業中に多くそれらを取り扱い、読み取る力を向上させる。 ・児童がじっくり思考できる時間を確保する。また、読み取った資料を要約し説明できるよう、「つまりそれは？」と問いかけ、児童の思考を揺さぶる。

全国学力・学習状況調査 <小6・中3> (4月～5月)

⑤	評価(※)	調査結果	学力向上策の実施状況
知識・技能	A	多くの児童に対し、授業や朝学習(国語タイム・算数タイム)において確認プリントや小テストを実施し、基礎学力の定着を図った。学年・学級により教科や実施頻度は様々で、実態に応じて実施した。「さいたま市学習状況調査」の生活習慣調査において、「授業がよく分かりますか」の質問に対し高い肯定的評価となったのは、具体物を授業で多く利用したり、映像・画像を適宜扱った授業を実施したりしたことにより、児童の関心・意欲が高まったからと考えられる。	
思考・判断・表現	A	写真やグラフなど資料の見方を考えさせる機会を多くし、資料を分析する力を養ってきた。キーワードを組み合わせた文章化も、少しずつ児童自身が出来ようになりつつある。タイミング交流により友達との考えに触れることで、自分の考えを深め、根拠をもって発表できるようになってきた。R7年度のさいたま市学習状況調査「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか。」の肯定的回答の割合が約94%で、課題解決に向上心と発表への自信が備わってきていると考えられる。	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語・算数・理科のすべての教科の知識・技能の正答率が低く、国語では特に漢字の書き取り、算数では図形に対する理解度、理科では電流のつなぎ方等に関する問題に課題が見られた。共通して言えることとして、その書き方ややり方等を一度学んだ基礎的知識が、しっかりと定着していないということがいえる。児童質問で「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」に対する肯定的回答が9割以上なので、常に見直し・確認することを習慣化し、知識の定着を図る指導をしていく。	
思考・判断・表現	国語・算数・理科のすべての教科の思考・判断・表現の正答率が低く、国語では時間や事柄の順序を捉える問題、算数では解決に必要な情報を見出す問題、理科では解決するための観察や実験を適切に見出せるかという問題に課題が見られた。共通して言えることとして、知識を活用した上で正しい方法などを見出し、自らの考えを記述することが難しいことが考えられる。児童質問で「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」に対する肯定的回答が9割以上なので、引き続き児童の意欲を損なわないようにし、適切な解答ができるよう指導していく。	

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語の語彙や基本読解力の正答率の上昇が見られたが、基本語彙や文法事項の定着に課題が見られる学年がある。算数の正答率が高く、高学年で、速度的問題や2つの数量関係の計算、割合の問題の正答率が昨年度より大きく上昇し、基礎力が十分に育っている。社会では、地理で方位や地図記号、国土の位置をしっかりとらえ、歴史において時代背景や文化の理解、公民の基本事項や資料の要点理解がしっかり定着している。理科は粒子・生命・地球・エネルギーといった内容を、関連付けて理解する段階でつまづきが見られる。	
思考・判断・表現	国語は特に6年「読むこと」で本文構造の把握や要旨化、図表照合に大きな課題が残る。算数は全学年で昨年度の正答率から大きく上昇した。数量の変化を根拠に説明する力が定着していると言える。社会では資料に基づき理由つけて説明する力が定着しており、資料読解と語彙の即応性が強みとなっている。一方、理科は観察・データを基に因果関係を説明することに課題がみられる。特に「粒子」、「生命」、「地球」などで既習事項と関係付けて説明する経験が不十分であると考えられる。全体として、根拠をもって説明する力は、教科間で差があるので、教科等横断的に重点的な指導が求められる。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	・プリントや小テストの実施直後は、知識としての成果が見られたが、数日後定着していない。必要に応じて、スモールステップで学習の進捗をきつ戻りつする必要があると考える。 ・授業開始時に前時に学んだことの確認をすると、答えられる児童とそうでない児童が半々でいる。振り返り、次時への見直しをもたせることで、意欲を高めて知識・技能の定着を図る。	・前時だけでなく、単元を通して確認を行い、さらに確認する内容をランダムにして、思考を刺激する。【2学期以降・毎時】 ・具体物や図、グラフ、または自作スライドや映像など、視覚的に印象の残りやすい授業を意識して展開する。【2学期以降・多め】
思考・判断・表現	B	・根拠をもとに考えることが苦手な児童が多く、思考が止まってしまうままにしている児童や、取り組むことを諦めてしまっている児童が見られる。 ・長期での定着が難しい。じっくり思考する時間を確保できていない。	・幾つか選択肢やキーワードなどを与え、「自分で考えて書き出す(表現する)」ことに主体的に取り組めるようにする。【2学期以降・多め】 ・授業の進め方をマネジメントし、教師主体と児童主体のメリハリをつけて、じっくり思考できる時間を生み出す。【2学期以降・多め】

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)